

スクミリンゴガイの発生状況と対策について

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 植物防疫研究部門
作物病害虫防除研究領域 上級研究員 松倉 啓一郎

■はじめに

スクミリンゴガイ *Pomacea canaliculata* は、もともとは南米のラプラタ川周辺に分布していたが、1980年代に食用として世界各地に持ち出された。国内では移植直後のイネ *Oryza sativa* を食害する害虫（害貝）として問題となっている。2000年ごろまでは、この貝による被害は九州の平野部などの温暖な地域に限られていたが、近年、その発生地域は拡大傾向にあり、それと同時に貝の発生量も増加している。これは、地球温暖化により、以前はこの貝が越冬できなかった地域でも越冬が可能となったことや、既存の発生地域での越冬率が高まったことが原因と考えられている。ここでは、スクミリンゴガイの近年の発生状況とその対策の概要を解説する。

■近年の被害の多発

2000年以降、九州以外の地域でも被害が顕在化している。比較的気候が温暖な関西から関東にかけての太平洋沿岸部など、以前からこの貝が生息していた地域では発生量の増加にともなう被害が問題化しており、千葉県では2017年と2019年に病害虫発生予察注意報が発出された。

京都府や滋賀県、兵庫県などの関西各地では被害の深刻化に加え、新たな地域や地区への貝の侵入が確認されている。この貝は自力で他の地域に移動することはないが、この貝による除草効果を期待した一部生産者による放流や発生ほ場で使用した農機具に付着しての移動など、人為的な要因によって新たな地域に広がっている。



図1 スクミリンゴガイの卵（左）、成貝（右上）と、食害による欠株が発生したほ場（右下）

■防除対策

イネを食害する貝は前年からの越冬個体であるため、越冬個体を主な対象として防除を実施する。防除対策はその実施時期により、秋・冬の防除と移植期前後の防除に分けられる。

秋・冬の防除においては、厳冬期前のほ場の耕うんが重要となる。耕うんにより土中で越冬している貝を物理的に破砕するとともに、土中の貝を地表に掘り起こすことで寒風による殺貝も期待できる。田面が硬いときに土を細かく砕くように耕うんすることで破砕効果は高まる。ほ場内の越冬貝の密度が高い場合には、本種に農薬登録のある石灰窒素を散布することも効果的である。ただし、石灰窒素による殺貝にはほ場が湛水状態で水温が17℃以上である必要がある。

移植期前後の防除では浅水管理と薬剤散布が対策の中心となる。この貝は水深が4cmより浅いとイネを食べることができないため、移植後3週間ほど水深を4cm以下に維持すれば被害は発生しない。ただし、ほ場内に極端な傾斜や凹凸がある場合には、田面の深くなったところで集中的に被害が発生する。移植期前後の薬剤としては、メタアルデヒド粒剤、燐酸第二鉄粒剤、チオシクロム粒剤等の登録薬剤を散布する。これらは、いずれも湛水状態でスクミリンゴガイの被害が出る前に散布する必要がある。また、薬剤の効果を持続させるために、散布後7日間は落水、かけ流しは避ける。また、ほ場周辺の河川や水路に大型のスクミリンゴガイが生息している場合には、ほ場の取水口や排水口にネットや金網を設置し、水路からの大型の貝の侵入を防ぐ必要がある。河川や水路にはほ場内では越冬できないような大型の貝が生息しており、これが移植直後のほ場に流入すると、被害は甚大となる。

参考文献：

農林水産省消費・安全局植物防疫課（2022）スクミリンゴガイ防除対策マニュアル（移植水稻）。（オンライン）入手先 <https://www.maff.go.jp/syouan/syokubo/gaicyu/siryu2/sukumi/PDF/sukumi_manual.pdf>.（参照 2022-09-01）